

2024 年度 聖学院大学
公募制推薦 入学試験 小論文 問題

問 次の文章を読み、以下の①と②について、合わせて 800 字以内で記述しなさい。

- ① 本文のリモート授業や仮想現実に関する著者の主張をまとめなさい。
- ② 著者の主張を踏まえて、あなたの意見や考え、経験を述べなさい。

「リモートのほうが有効なもの」

仕事や学業が仮想現実で修められるものかと思う方もいるだろう。しかし、2020年のコロナ禍は、リモートでもこれらがそれなりに機能することを実証した。もちろん、人が実際に集まり、対面することで有効に機能する活動は多い。しかし、そうでないもの、中にはリモートのほうがずっと有益なものもあることが、同時にあぶり出された。

私は正直なところ、コロナ禍での Zoom やグループミートを使ったりリモート授業があまり面白くなかった。通常のディスプレイを使ってやっているのに、無理矢理リアルを比喻化した環境になっているのが原因だと考えている。

どうせリモートで授業をするのであれば、授業自体を仮想現実で構成してしまえばよいのである。低廉化されたコンシューマ向け VR 技術でも、みんなで車座になって座ったり、ホワイトボードに書き込んだり、ジェスチャーを交えてディスカッションしたりすることができる。

感染症のリスクなどは今後も社会にあり続けるだろう。また、リモートの教育に効果があることが示された今、体感的に拡大し続ける所得格差や多様な生き方に対応するための教育の処方箋として、リモート授業は有効な選択肢になっていくだろう。リモートでいいならば、仮想現実を使って授業をしたい、授業を受けたいという動きは、必ず出てくる。それはまだ実現していないだけで、約束された未来だと考えていい。

私も、リアルか、リモートのどちらでも授業形態を選んでよく、かつ仮想現実内でのリモート授業を行ってよければ、まず間違いなくそれを選ぶ。というのは、現代の教育現場では顧客満足度が重要な指標だからだ。

それ自体はよいことだと思う。従来の類型化した大学教授像の一部に見られるような、教員の独り言のような授業はいいものではない。

しかし、授業評価アンケートなどが重要度を増してくると、その評価に応じて報酬にも差をつけるといった動きも出てくる。報酬はどうせなら多いほうがいいので、評価がよくなるように策を巡らす。

授業評価アンケートで高評価への寄与が大きい変数はクラスサイズと教員の年齢だ。クラスサイズはともかくとして、仮想現実であれば年齢はごまかしがある。アバターの姿態を若くしておけばいい。私のような老人でも、ちょっとは評価が上がるかもしれない。これは授業だけでなく、高齢化せざるを得ない労働市場にも転用できるだろう。

仕事内容もそうだ。教育と同様に、ディスカッションやプレゼンテーションの多くは、リモート技術で置換可能である。それを望む者ばかりではないが、望む者は存在し、その数は確実に増えている。普及が拡大しないのは、単にリモート技術が発展途上で、まだリアルに利便性が感じられるからだ。

今後の技術の高度化により、この懸隔は埋められていくだろう。人々が仮想現実内で過ごす時間を拡大させるならば、リアルでの会社の業務を仮想現実再現するだけでなく、仮想現実内で完結する仕事や仮想現実内でできない仕事も増えていく。

岡嶋裕史、メタバースとは何かーネット上の「もう一つの世界」、光文社